

清肺排毒湯と上海方案 ～中医治療ができるまで～

2019 年末の武漢から、そして米国や欧州を含む世界各国に大きな影響を与えた新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下、新型コロナ）ですが、私自身も 2020 年 1 月 16 日以降、日本に戻ることなく上海で中国の動向を連続的に見てきました。いまでも鮮明に覚えているのが、テレビやインターネットを通じ、武漢で刻々と増えてくる確定例の報道に尋常でない空気を感じたことです。

実は、2002 年の中国広東省から始まった SARS のときも上海に在住していましたが、今回はそのときとは大きな違いを感じました（ドキュメント①参照）。もちろん、武漢における初動のまずさは指摘されていましたが、中国各地で SARS のときの経験がかなり活かされていたからです。たとえば、中国全国の病院に細々と残されていた発熱専門外来は、今回、十分に活用されていましたし、上海市金山区に設置された新型コロナに対応できる陰圧病室 300 床をもつ感染症専門病院の上海市公共衛生臨床センターも SARS の教訓のうえに設置されたものです。一方で、私が勤める病院のように発熱専門外来をもたない医療機関や、歯科・眼科・耳鼻咽喉科のように潜在的に感染リスクが高い病院、一般の外来などはただちに閉鎖され、疑わしき患者をすべて発熱専門外来に誘導し、確定例を感染症専門病院に搬送して隔離を徹底しました。発熱専門外来は、救急外来とも入り口を別にし、上海では専用の CT を設置するなど院内感染を防ぐための工夫がとられていました（写真134・135）。そして何よりも特筆すべきは、そうした感染症専門病院に中医学の専門家が常駐し、西洋医学の感染症専門家とともに同時に治療にあたったこと



写真134 院内感染を防ぐため、病院の外でテントを設営して発熱外来を行っているところも。



写真135 発熱外来は24時間診療されているところがほとんど。

です。治療における中医学に対する期待の高さと、国を挙げての中西医結合治療への迅速な取り組みが行われたことは特筆すべきことです。たとえば、入院病棟で西洋医師と中医師の合同回診が行われたり、中国各地で重症や重篤患者に対して中医学が積極的に使われたことは大きな変化といえます。

2020年5月にもなると、上海だけでなく、武漢も日常を取り戻しました。一時、外出制限もあった上海ですが、2月10日以降から徐々に回復し、ショッピングモールや飲食店にも人が戻り、上海ディズニーリゾートも再開し、学校への登校も段階的に再開しました。ただ、世界各国から輸入例が続く限り、さらに変異株が出続ける限りは、ワクチン接種が普及しても確定例が散発的に現れるため、常に予断を許さない状態にあることには変わりありません。これからも長期間の警戒を覚悟した取り組みが行われることでしょう。

ここでは、私が中国に滞在して生活しながら感じた中国における中医学の取り組みについて、そして中医学の治療薬である清肺排毒湯が登場するまでの流れを追っていきます。

ひと筋縄ではいかなかった西洋医師と中医師の協力

武漢市の金銀潭医院は伝染病専門病院であり、最も早い時期に数多くの新型コロナ患者を収容した病院の一つでした（写真136）。この西洋医学の専門病院に、北京から黄璐琦院士が率いる国家中医药管理局の国家中医医療隊（中国中医科学院広安門医院・西苑医院）が到着したのが2020年1月25日でした。ここは西洋医学の病院であったため、煎じ薬や単味顆粒エキス剤を処方するシステムどころか、中医薬の院内薬局もなく、電子カルテも中医薬に対応していませんでした。中医薬に関しては文字通りゼロからの出発だったといいます。ここに重症患者も収容して中医学治療も行う専用の病区を設置し、初めて中医の処方箋が印刷できるようになったのが1月27日からだったそうです。中医系の医療システムで重大感染症に対応するために、西洋医学の病院内に独立した中医学の病区を設置することになりました。もちろん、中医学のスタッフとはいえ感染症の専門家でもあるため、重症患者には中医薬だけでなく、人工呼吸器やECMOが使用され、中医学と西洋医学を併用した中西医结合治療が行われました¹⁾。こうした伝統医学と西洋医学の併用が行えるのも、中国の医療システムの特徴の一つといえるでしょう。

その後、中医臨床専用のスマートフォンアプリも開発され、回診時に収集された症状・舌診・脈診・体温などのデータが集計・整理され、金銀潭医院における中西医结合治療による成果が目に見えてわかりやすくなり、西洋医師や患者からの信頼も徐々に得られるようになってきたといいます²⁾。



写真136 武漢の金銀潭医院は伝染病専門病院。武漢が落ち着いてから整備事業が行われていました。

中医学は中国で誕生したとはいえ、西洋医学の医師すべてに認識されているわけではなく、一部の医師からは偏見の目さえあるのは事実です。たとえば、「中医薬は効かない」と真剣に語る西洋医師は中国にも少なくありません。患者に向かって「中医薬は肝機能を悪くする」と語る西洋医師もあり、今回の新型コロナの治療においても初期の頃は現場の苦労も絶えなかったと、成都中医薬大学附属医院の扈曉宇主任医師は語っています³⁾。日頃から中医学の現場にかかわることのない西洋医師からすれば、そう考えるのは無理もないと普段から上海の臨床現場にいる私にはわかります。そのため、まずはそういった疑念を晴らし、中西医结合治療を円滑に進めるために、臨床現場では西洋医師にも中医学に対する理解を深めるための様々な試みが行われました。

たとえば、プレハブ方式の突貫工事で建設された新型コロナ専用の雷神山医院(写真137)では、遼寧省・山西省・河北省から救援に来た西洋医学の医療チームと、上海市・吉林省・広東省などから来た中医治療チームと一緒に仕事をすることになりました。まず第一線の医師たちをSNSでつなげ、西洋医師からの様々な疑問に答えられるようにし、ネット上での中医師と西洋医師のカンファレンスが強化されました。その結果、重症患者に対しては、共通した協定処方だけでなく、中医師が実際に回

診することで、個別に一对一の処方が組めるような仕組みも構築されました⁴⁾。

西洋医師にも中医学の治療方法を理解しやすくするため、『雷神山医院中医薬防治新冠病毒簡易操作手冊』という冊子が編集され、そこでは軽症・普通型・重症の6種類の弁証と協定処方紹介され、発熱や咳の程



写真137 武漢雷神山医院と筆者。現在でも施設は保全されています。

度を（＋）や（－）で表記して、中医学を深く知らなくても理解できるような方法が考え出され実践されました。また、中医学による補助療法も紹介されており、実践しやすくなっています。

一方で、西洋医師にとって、中医師ならではの診察方法にメリットを感じることもあったようです。とくに今回のような非常時において、中医学の四診は患者との距離感を縮め、西洋医師と中医師が一緒に回診することで、患者の情緒も改善し、より円滑に診察ができるようになったと、広州医科大学附属第一医院心内科の陳愛蘭主任はインタビューに答えています⁵⁾。そのほか、広東省のチームは、武漢市の漢口医院で147人の患者全員に中医薬を処方しましたが、怠さ・便秘・食欲不振・息切れなどの症状が中医薬を服用後に大きく改善し、重篤患者9例のうち、7例で人工呼吸器から離脱できたそうです⁶⁾。また、内径2ミリ未満の細小気管支に痰が詰まることの解決は当時の西洋医師にとって治療上の大きな課題で、これが患者の血中酸素濃度（SpO2）を下げ、肺線維化を招く要因の一つになっていました。そこで中医学の医療チームが中医薬処方を考えました。たとえば、広州中医薬大学第一附属医院の医療チームは、湖北省中西結合医院呼吸器科を支援していましたが、ここではその病態を痰湿阻肺と考え、麻杏甘石湯・甘露消毒丹・平胃散などを使って利湿化濁・清熱解毒をさせ、痰が詰まる症状を大きく改善させました⁷⁾。こうした例を、西洋医師の目の前で実際に行うことによって、中医学を現場で受け入れるための素地が積み上げられていったようです。

また、当初は各病院における中医薬の在庫確保も大きな問題でした。雷神山医院における吉林省チームの取り組みでは、少しでも早く患者に中医薬の処方が始められるように、救急車を改造した単味顆粒エキス剤を調合する「流動智能応急中薬房」と呼ばれる移動式の薬局が設置され、300種類の単味顆粒エキス剤をすぐに調剤できる自動化された調剤機が導入されました⁸⁾（写真138）。これにより逐一生薬を煎じる手間が省け、患者も顆粒エキス剤をお湯に溶かすだけで服用できるので利便性が大幅に向上しました。こういった単味顆粒エキス剤を現場で使う試みは、中

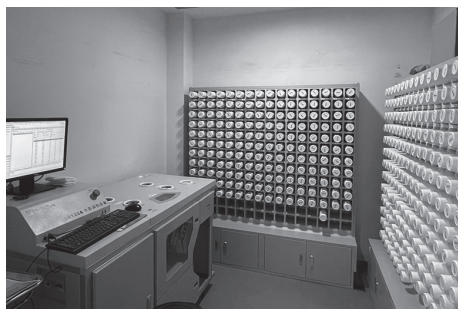


写真138 中国で広く普及している単味顆粒エキス剤。調剤・分包機も全自動化されており、煎じる必要もないため、武漢でも大いに役立っていました。

薬メーカーが大きく貢献しており、現場で使われる協定処方箋の製造も各地で行われました。

こうした現場の努力もあり、中医学の活用は広がっていきました。2020年3月24日の国務院の記者会見では、中国全国では確定患者全体の9割を占める7万4千人に対して中医学

による治療が行われ、湖北省には全国から来た医療支援隊の13%を占める4,900人の中医学医療隊が活動中と発表されています⁹⁾。

三方三薬～清肺排毒湯の投入～

「三方三薬」とは、湖北省や武漢における中医薬治療でよく耳にした言葉です。三方とは清肺排毒湯・化湿敗毒方・宣肺敗毒方、三薬とは金花清感顆粒・連花清瘟カプセル・血必淨注射液を指します（詳細は第5章）。

（1）清肺排毒湯

2021年9月現在、中国当局は新型コロナの治療に関して、第1版～第8版修訂版までの診療方案（ガイドライン）を発表しています。とくに、第3版以降で中医学の治療法が充実し始め、2020年2月18日に公表された第6版で中医学による治療方法が出揃いました。この第6版で掲載された中医薬の内容は、国家中医薬管理局と、中国工程院の王永炎院士のほか、晁恩祥・薛伯寿・周仲瑛・熊継柏ら国医大師のアドバイス、国家中医薬管理局の専門家チームとして現地入りした張伯礼院士らと討論が重ねられ、さらに中国中医科学院広安門医院のチームによる文献研